

水 附渡船

永井荷風

青空文庫

フランス人エミル・マンユの著書都市美論の興味ある事は既にわが随筆「大窪おほくぼだより」の中うちに述べて置いた。エミル・マンユは都市に対する水の美を論ずる一章に於て、広く世界各国の都市と其の河流及び江湾の審美的關係より、更に進んで運河沼沢噴水せうたく橋梁等の細節さいせつに涉つて此これを説き、猶其の足らざる處おぎなを補はんが為めに水流に映ずる市街燈火の美を論じてゐる。

今試こころみに東京の市街と水との審美的關係を考ふるに、水は江戸時代より繼續して今日こんにちに於ても東京の美觀を保つ最も貴重なる要素となつてゐる。陸路運輸の便べんを欠いてゐた江戸時代にあつては、天然の河流たる隅田川と此れに通ずる幾筋の運河とは、云ふまで

もなく江戸商業の生命であつたが、其れと共に^{とも}都会の住民に対し
 ては春秋四季^{しゆんじうしき}の娯樂を与へ、時に不朽の価値ある詩歌^{しいか}絵画をつ
 くらしめた。然るに東京の今^{こんにち}日市内の水流は単に運輸の為め
 のみとなり、全く伝来の審美的価値を失ふに至つた。隅田川は云ふ
 に及ばず神田のお茶の水本所^{ほんじよ}の豎川^{たてかは}を始め市中^{しちゆう}の水流は、
 最早^{もは}や現代の吾々には昔の人が船宿の棧橋から猪牙船^{ちよきぶね}に乗つて
 山谷^{さんや}に通ひ柳島^{やなぎしま}に遊び深川^{ふかがは}に戯れたやうな風流を許さず、
 また釣や網の娯樂をも与へなくなつた。今日^{こんにち}の隅田川は巴里^{パリ}に
 於けるセーヌ河の如き美麗なる感情を催さしめず、また紐育^{ニューヨーク}
 のホドソン、倫敦^{ロンドン}のテエムスに対するが如く偉大なる富国^{ふこく}の壮
 観をも想像させない。東京市の河流は其の江湾なる品川^{しながは}の入^{いりう}

海と共に、さして美しくもなく大きくもなく又さほどに繁華で

もなく、誠に何方つかずの極めてつまらない景色をなすに過ぎない。しかし其れにも係らず東京市中の散歩に於て、今日猶比較的興味あるものは矢張水流れ船動き橋かゝる処の景色である。

東京の水を論ずるに當つてまづ此を區別して見るに、第一は品

川の海湾、第二は隅田川中川六郷川の如き天然の河流、第三

は小石川の江戸川、神田の神田川、王子の音無川の如き細流、

第四は本所深川日本橋京橋下谷浅草等市中繁華の町に通ず

る純然たる運河、第五は芝の桜川、根津の藍染川、麻布の

ふるかは古川、下谷の忍川の如き其の名のみ美しき溝渠、もしく

は下水、第六は江戸城を取巻く幾重の濠、第七は不忍池、角

のはずしふにさう
筈十二社の如き池である。井戸は江戸時代にあつては三宅坂

側の桜ヶ井も清水谷の柳の井、湯島の天神の御福の井の如

き、古来江戸名所の中に数へられたものが多かつたが、東京にな

つてから全く世人に忘れられ所在の地さへ大抵は不明となつた。

東京市は此の如く海と河と堀と溝と、仔細に観察し来れば其等

幾種類の水——既ち流れ動く水と淀んで動かぬ死したる水とを有

する頗變化に富んだ都会である。まづ品川の入海を眺めんにご

こは目下猶築港の大工事中であれば、将来如何なる光景を呈し来

るや今より予想する事はできない。今日まで吾々が年久しく見

馴れて来た品川の海は僅に房州通の蒸汽船と円ツこい達磨

船を曳動す曳船の往来する外、東京なる大都会の繁榮とは

直接にさしたる関係もない泥海どろうみである。潮しほの引く時泥土でいどは目のとゞく限り引続いて、岸近くには古下駄はひよに炭俵きたなどぶ、さては皿小鉢ざらこや椀わんのかけらに船虫ふねむしのうようよと這寄はひよるばかり。この汚きたなどぶい溝ぼのやうな沼地ぬまちを掘返をりくしながら折々ごかひは沙蚕ごかひ取りが手桶てづつを下くだげて沙蚕ごかひを取つてゐる事がある。遠くちりあくたの沖なみには彼方かなた此方こなたに滯みや粗朶そだが突立つつてゐるが、これさへ岸より眺あひだむれば塵ちりあくた芥かかと思はれ、その間あひだに泛うかぶ牡蠣舟かきぶねや苔のりとり取こぶねの小舟こぶねも今は唯強しひて江戸えどの昔つあくわいを追つあくわい回わいしやうとする人の眼めにのみ聊いさかの風趣いさを覚えさせるばかりである。かく現代の首府しほに対しては実用にも裝飾にも何にもならぬ此の無用なる品川湾あひまの眺望あひまは、彼の八ツ山かやの沖やまに並おきんで泛うかぶ此これも無用なる御台場おだいばと相俟あひまつて、いかにも過去すぎさつた時代の遺物うきものらしく放棄あきらさ

れた悲しい趣おもむきを示してゐる。天氣のよい時しらほ白帆うきぐもや浮雲と共に望み得られる安房上総あはかづさの山影さんえいとても、最早もはや今日こんにちの都会人にはか彼のはな花川戸助六はなかわのりすけが台詞せりふにも讀込まれてゐるやうな爽快な心持を起させはしない。品川灣の眺望に對する興味は時勢と共に全く湮滅してしまつたに係かゝらず、其の代りかはとして興るべき新しい風景に對する興味は今日こんにちに於ては未だ成立いまなりたたずにゐるのである。

芝浦しばうらの月見も高輪たかなわの二十六夜待にじふろくやまちも既になき世の語かたりぐさ草

である。南品なんぴんの風流を伝へた楼台ろうだいも今は唯不潔たゞなる娼家しやうかに

過ぎぬ。明治二十七八年頃江見水蔭子えみすゐいんしがこの地の娼婦しやうふを材料と

して描ゑがいた小説「泥水清水どろみづしみつ」の一篇は当時硯友社けんいうしやの文壇に傑

作として批評されたものであつたが、今よりして回くわいさう想すれば、

これすら既に遠い世のさまを描いた物語のやうな気がしてならぬ。

かく品川の景色の見捨てられてしまつたのに反して、荷船の帆

柱と工場の煙筒の叢り立つた大川口の光景は、折々西洋の漫

画に見るやうな一種の趣味に照して、此後とも案外長く或一派の

詩人を悦ばす事が出来るかも知れぬ。木下柰太郎 北原白秋

諸家の或時期の詩篇には築地の旧居留地から月島永代橋あた

りの生活及び其の風景によつて感興を発したらしく思はれるもの

が尠くなかつた。全く石川島の工場を後にして幾艘となく帆柱

を連ねて碇泊するさま／＼な日本風の荷船や西洋形の帆前船

を見ればおのづと特種の詩情が催される。私は永代橋を渡る時

活動する此の河口の光景に接するやドオデエがセエン河を往復

する荷船の生活をゑが描いた可憐なる彼の「ラ・ニベルネエズ」の一
 小篇を思おもひだ出すのである、今日こんにちの永代橋には最早もはや辰巳たつみの昔を
 回想せしむべき何物もない。さるが故に、私はえいたいばし永代橋の鉄橋を
かへつば却てかのあづまばし吾妻橋やりやうごくばし両国橋の如みにくに醜みにくいと思はない。
 新しい鉄の橋はよく新しい河口かこうの風景に一致してゐる。

私が十五六歳の頃であつた。えいたいばし永代橋の河下かはしもには旧幕府の軍
 艦が一艘商船学校の練習船として立たちぐさ腐れあさくさばしのまゝに繋つながれてゐた
 時分、同級の中学生といつものやうに浅草橋あさくさばしの船宿こがねから小舟を
 借りてこの辺へんを漕かぎ廻り、河かはなか中に碇泊はまへせんして居る帆前船を見物
 して、こわい顔した船長から椰子やしの実を沢山貰つて歸つて来た事

がある。其の折をり私達は船長がこの小さな帆前船ほまへせんを操あやつつて遠く南洋まで航海するのだといふ話を聞き、全くロビンソンの冒険談を読むやうな感に打たれ、将来自分達もどうにかしてあのやうな勇猛なる航海者になりたいと思つた事があつた。

やはり矢張其の時分の話である。築地つぎぢの河岸かしの船宿から四挺艦しちやうろのボオトを借りて遠く千住せんじゆの方まで漕のぼぎ上つた帰り引汐ひきしほにつれてつくだじま佃島つくだじまの手前まで下くだつて来た時、突然向むかうから帆を上げて進んで

来る大きな高瀬船たかせぶねに衝突さいはし、幸さいひに一人も怪我むかうはしなかつたけれど、借りたボオトの小舷こへりをば散々に破こはしてしまつた上に權かゝいを一本折つてしまつた。一同は皆親みながりのものばかり、船遊びをする事も家うちへは秘密くらゐにしてゐた位くらゐなので、私達は船宿へ歸つて万一

破損の弁償金を請求されたらどうしやうかと其の善後策を講ずる
 ために、佃島つくだじまの砂の上にボオトを引上げ浸水をかい出しなが
 ら相談をした。その結果夜暗くなつてから船宿の棧橋へ船を着け、
 宿の亭主が舷ふなべりの大破損に気のつかない中一同いちもくさん一目散に逃げ出す
 がよからうといふ事になつた。一同はお浜御殿はまごてんの石垣下まで漕こ
 入ぎいつてから空腹くうふくを我慢しつゝ水の上の全く暗くなるのを待ち船
 宿の棧橋へ上あがるや否や、店に預けて置いた手荷物を奪ふやうに引ひ
 つかつかみ、めいゝ後あとをも見ず、ひた走りに銀座の大通りまで走つ
 て、漸やっと息をついた事があつた。その頃には東京府々立の中学校
 が築地つぎぢにあつたのでその辺へんの船宿では釣船の外にボオトをも貸し
 たのである。今日こんにち築地つぎぢの河岸かしを散歩しても私ははつきりと其の

船宿の何処いづこにあつたかを確めることが出来ない。わづか二十年ぜん前なる我が少年時代の記憶の跡すら既にかくの如くである。東京市街の急激なる変化は寧ろ驚くの外ほかはない。

おほかはすぢ

大川筋 一帶の風景について、其の最も興味ある部分は今述べたやうに、永代橋河口えいたいばしかこうの眺望を第一とする。吾妻橋あづまばし 両国橋りやうごくばし等の眺望は今日こんにちの処あまりに不整頓にして永代橋に於けるが如く感興を一所に集注する事が出来ない。之これを例するに浅野セメント会社あさくさくらまへの工場と新大橋しんおほはしの向に残る古い火見櫓ひのみやぐらの如き、或は浅草蔵前あさくさくらまへの電燈会社と駒形堂こまがたどうの如き、国技館こくぎかんと回向院ゑかうあんの如き、或は橋場はしばの瓦斯タンクがすと真崎稻荷まつさきいなりの老樹の如き、其等

工業的近世の光景と江戸名所の悲しき遺蹟とは、いづれも個々別々に私の感想を錯乱させるばかりである。されば私は此の如く過去と現在、既に廢頽と進歩との現象のあまりに甚しく混雜してゐる今日こんにちの大川筋おほかはすぢよりも、深川ふかがはをなぎがは小名木川さるえうらより猿江裏なごりの如くあたりは全く工場地に変形し江戸名所の名残も容易くは尋ねられぬ程になつた処を選ぶ。大川筋おほかはすぢは千住せんぢゆより両国りやうごくに至るまで今日こんにちに於てはまだく工業の侵略が緩慢に過ぎてゐる。本所ほんじよ小梅こうめから押上辺おしあげへんに至る辺あたりも同じ事、新しい工場町こうぢやうまちとしてこれを眺めやうとする時、今となつては却て柳島かへつ やなぎしまの妙見堂めうけんだうと料理屋の橋本はしもとが目ざはりである。

運河の眺望は深川ふかがはの小名木川をなぎがはへん辺に限らず、いづこに於ても隅田川の兩岸に對するよりも一体にまとまつた感興を起させる。一例を挙げれば中州なかずと箱崎町はこぎきちやうの出端でばなとの間に深く突入あひだつてゐる。堀割は此れを箱崎町の永久橋えいきうぼしまたは菖蒲河岸しやうぶがしの女橋をんなぼしから眺めやるに水は恰あたかも入江の如く無数の荷船は部落の觀をなし薄暮風収をさまる時競きそつて炊烟すゐえんを棚曳たなびかすさま正ただに江南かうなん沢国たくこくの趣おもむきをなす。凡すべて溝渠こうきよ運河の眺望の最も變化に富み且かつ活氣を帯びる處は、この中洲なかずの水のやうに彼方かなた此方こなたから幾筋いくすぢの細い流れが稍や広い堀割を中心にして一個所に落合おちあつて来る處、若もしくは深川の扇あふぎぼし橋の如く、長い堀割が互に交叉して十字形をなす處である。本所柳原ほんじよやなぎはらの新辻橋しんつじぼし、京橋きやうぼし八丁堀はつちやうぼりの白魚橋しらうをぼし、靈岸れいがん

島の靈岸橋あたりの眺望は堀割の水の或は分れ或は合する處、
 橋は橋に接し、流れは流れと相激し、稍ともすれば船は船に突
 当らうとしてゐる。私はかゝる風景の中日本橋を背にして江戸橋
 の上より菱形をなした広い水の片側には荒布橋つゞいて思
 案橋、片側には鎧橋を見る眺望をば、其の沿岸の商家倉庫
 及び街上橋頭の繁華雑沓と合せて、東京市内の堀割の中にて最
 も偉大なる壯觀を呈する處となす。殊に歳暮の夜景の如き橋
 上を往来する車の灯は沿岸の燈火と相乱れて徹宵水の上に
 揺き動く有様銀座街頭の燈火より遙に美麗である。
 堀割の岸には処々に物揚場がある。市中の生活に興味を
 持つものには物揚場の光景も亦しばし杖を留むるに足りる。夏

の炎天神田かんだの鎌倉河岸かまくらがし、牛込揚場うしごめあげばの河岸かしなどを通れば、荷車の馬は馬方と共につかれて、河添かはぞひの大きな柳の木の下したに居眠りをしてゐる。砂利じやりや瓦かはつちや川土かはつちを積み上げた物蔭にはきまつて牛ぎうめ飯しやするとんの露店ろてんが出てゐる。時には氷屋も荷おろを卸してゐる。荷車の後押しをする車力の女房は男と同じやうな身仕度をして立ち働き、其の赤児あかごをば捨児すてごのやうに砂の上に投出してゐると、其の辺へんには瘦やせた鶏けいが落ちこぼれた餌あさをもりつくして、馬の尻ぼんから馬糞ぼんの落ちるのを待つてゐる。私はこれ等の光景に接すると、必かならず北斎きざい或はミレエを連想して深刻なる絵画的写実の感興いざなを誘いざなひ出され、自らみづか絵事くわいじの心得なき事を悲しむのである。

以上かりう河流と運河の外なほ猶東京の水の美に關してはしよく処々しよくの下水が
 落合つて次第に川の如ながれき流をなすみぞかは溝川の光景を尋たづねて見なければ
 ならない。東京の溝みぞかは川には折々をりく可笑をかしい程事実と相違した
 美しい名がつけられてある。例へば芝しば愛宕あたご下なるせいしようじ青松寺の前
 を流れる下水を昔からさくらがは桜川と呼び又今日では全く埋うづめ尽
 されたかんだ神田鍛冶町かぢちやうの下水を逢あひそめがは初川、橋場はしば総泉寺の裏手から
 真まつ崎へ出るみぞかは溝川を思おもひがは川、また小石川こいしかは金剛寺こんがうじ坂下の下
 水にんじんがはを人參川と呼ぶ類たぐひである。江戸時代にあつては此等の溝みぞかは川
 も寺院の門前や大名屋敷の堀へいそと外なぞ、幾分か人の目につく場所
 を流れてゐたやうな事から、土地の人にはその名の示すが如き特
 殊な感情を与へたものかも知れない。然し今日こんにちの東京になつて

は下水を呼んで川となすことすら既に滑稽なほど大袈裟である。おほげさ

かくの如く其の名と其の実との相あひともな伴はざる事は独り下水の流れ

れのみには留まらない。江戸時代とまた其の以前からの伝説を継

承した東京市中各処の地名には少しく低い土地には千仞せんじんの幽谷

を見るやうに地獄谷ぢごくだに（麴町にあり）千日谷せんいちだに（四谷鮫ヶ橋に在

り）我善坊ヶ谷がぜんぼうだに（麻布に在り）なぞいふ名がつけられ、また少

しく小高い処は直ちに峨々がゝたる山岳の如く、愛宕山あたごやま道灌山どうかんやま待

乳山つちやまなぞと呼ばれてゐる。島なき場所も柳島やなぎしま三河島みかはしま向

島しまなぞと呼ばれ、森なき処にも鳥森からすもり鷺の森さぎもりの如き名称が

残されてある。始めて東京へ出て来た地方の人は、電車の乗換のりかへ

場ばを間違へたり市中しちゆうの道に迷つたりした腹立はらだちまぎれ、斯かる

地名の虚偽を以てこれ亦また都会の憎むべき悪風として觀察するかも知れない。

溝みぞ川かはは元もとより下水に過ぎない。紫むらさきの一本ひともとにも芝うだがはの宇田川うだがはを説く条くだりに、「溜池たのいけの屋舗やしきの下水落ちて愛宕あたごの下したより増上寺ぞうじやうじの裏門うらがはしを流れて爰こゝに落おつる。愛宕あたごの下した、屋敷々々の下水も落ち込む故うだがはばし宇田川橋うだがはばしにては少しの川のやうに見ゆれども水みな上かみはかくの如し。

「とある通り、昔から江戸の市しちゆう中ちゆうには下水の落合つて川をなすものが少くなかつた。下水の落合つて川となつた流れは道に沿ひ坂の麓めくを廻り流れ流れて行く中うちに段々広くなつて、天然の河流又は海に落込むあたりになると何どうやら此かうやら伝馬船てんませんを通は

せる位くらゐになる。麻布あざぶの古川ふるかはは芝山内しばさんないの裏手あかば近く其の名も赤

羽川ねがはと名付けられるやうになると、山内さんないの樹木ごちゆうのたうと五重塔

の聳そびゆる麓ふもとを巡めぐつて舟楫しゅうしふの便べんを与よふるのみか、紅葉こうえふの頃は四

条派でうはの絵ゑにあるやうな景色けしきを見せる。王子わうじの音無川おとなしかはも三河島みかはしまの

野うらほを潤うるほした其の末みぞかはは山谷堀さんやぼりとなつて同じく船うかを泛うかべる。

下水みぞかはと溝川かはその上かに架かつた汚きたない木橋きばしや、崩くずれれた寺てらの塀へい、枯

れかゝつた生垣いけがき、または貧さいしい人家じんがの様さまと相對たいして、屢しばしば憂鬱うゑいな

る裏町うらまちの光景こうけいを組織そくしする。既すでち小石川こいしかは柳町やなぎちやうの小流こながれの如ごとき、

本郷ほんがうなる本妙寺坂下ほんめうじさかしたの溝川みぞかはの如ごとき、団子坂下だんごさかしたから根津ねづに

通とおずる藍染川あゐそめがはの如ごとき、かゝる溝川みぞかは流ながるゝ裏町うらまちは大たい雨うの降ふりる折をり

と云いへば必かならず雨潦うれうの氾濫かふむに災害さいがいを被かる処ところである。溝川みぞかはが貧民窟びんみんくわくに

調和する光景の中、其の最も悲惨なる一例を挙げれば麻布あざぶの古ふるか

川橋はばしから三之橋さんのはしに至る間あひだの川筋であらう。ぶりき板の破片や

腐つた屋根板で葺いたあばら家やは数町に渡つて、左右さいうから濁水だくすゐ

を挟んで互にその傾いた廂ひさしを向ひ合せてゐる。春秋時候はるあきの変り

目に降りつゞく大雨たいうの度たびごと毎ごとに、芝しばと麻布あざぶの高台から滝のやうに

落ちて来る濁水は忽ちりやうがん両岸りやうがんに氾濫して、あばら家やの腐つた土

台から廳やがては破れた畳たゝみまでを浸ひたしてしまふ。雨が霽はれると水に濡

れた家具や夜具蒲団やぐふとんを初め、何とも知れぬ汚きたならしい檻樓ぼろの数々は

旗のぼりか幟のぼりのやうにりやうがん両岸りやうがんの屋根や窓の上に曝さらし出される。そして

真黒な裸体らたいの男や、腰卷一つの汚きたない女房や、又は子供を背負つた

児こむすめ娘めまでが筮ざるや籠かごや桶をけを持つて濁流うちの中に入りつ乱れつ富裕な

屋敷の池から流れて来る雜魚ざこを捕へやうと急あせつてゐる有様、通りがりの橋の上から眺めやると、雨あがりの晴れた空と日光もとの下に、或時は却かへつて一種の壯觀を呈してゐる事がある。かゝる場合に看取かんしゆせられる壯觀は、丁度ちやうど軍隊の整列も若しくは舞台に於ける並ならび大だい名なを見る時と同様で一つ／＼に離して見れば極めて平凡なものも集合して一団をなす時には、此処に思ひがけない美麗と威嚴とが形造られる。古川橋ふるかはしから眺める大雨たいうの後の貧家あとの光景の如きも矢張やはりの此一例であらう。

江戸城の濠ほりは蓋けだし水の美の冠たるもの。然し此の事は叙述の筆を以てするよりも寧ろむし絵画の技ぎを以てするに如しくはない。それ故

私は唯代官町の蓮池御門、三宅坂下の桜田御門、九段坂下の牛ヶ淵等古来人の称美する場所の名を挙げるに留めて置く。

池には古来より不忍池の勝景ある事これも今更説く必要がない。私は毎年の秋竹の台に開かれる絵画展覧会を見ての帰り道、いつも市氣満々たる出品の絵画よりも、向ヶ岡の夕陽敗荷の池に反映する天然の絵画に対して杖を留むるを常とした。そして現代美術の品評よりも独り離れて自然の画趣に恍惚とする方が遙に平和幸福である事を知るのである。

不忍池は今日市中に残された池の中の最後のものである。江戸の名所に数へられた鏡ヶ池や姥ヶ池は今更尋る由もない。

せんさうじけいだい 浅草寺境内の べんてんやま 弁天山の池も既に町家まちやとなり、また赤坂の溜池しのばずのいけも跡方あとかたなく埋めつくされた。それによつて私は将来 不忍池しのばずのいけも亦同様の運命に陥りはせぬかと危むあやぶのである。老樹鬱蒼としておひしげおひしげさんわう 生茂る山王の勝地しょうちは、其の翠緑を反映せしむべき麓ためいの溜池けあつて初めて完全なる山水さんすゐの妙趣を示すのである。若し上野の山より 不忍池しのばずのいけの水を奪つてしまつたなら、それは恰あたかも両腕をもぎ取られた人形に等しいものとなるであらう。都会は繁華となるに従つて益々ますます自然の地勢から生ずる風景の美を大切に保護せねばならぬ。都会に於ける自然の風景は其の都市に対して金を以て造る事つくの出来ぬ威厳と品格とを帯おびさせるものである。巴里パリにも倫敦ロンドンにもあんな大きな、そしてあのやうに香かしい蓮はすの花

の咲く池は見られまい。

都会の水に關して最後に渡船わたしぶねの事を一言いちごんしたい。渡わたしぶ

船ねは東京の都市が漸次ぜんじ整理されて行くにつれて、即ち橋梁すなはの便

宜を得るに従つて廳やがては廃絶すべきものであらう。江戸時代さかのぼに遡

つて之これを見れば元禄九年に永代橋えいたいばしが懸かつて、大渡おほわたしと呼ばれ

た大川口おほかはぐちの渡場わたしばは江戸鹿子えどかのこや江戸爵杯えどすゞめなどの古書こしよにその跡を残

すばかりとなつた。それと同じやうに御厩おうまやかし河岸わたの渡しよろひわたしを始

めとして市中諸所の渡場わたしばは、明治の初年架橋工事かけうこうじの竣しゆんせい成せいと

共ともにいづれも跡を絶ち今は只浮世たゞ絵によつて当時の光景うかがを窺うかがふば

かりである。

然し渡場は未だ悉く東京市中から其の跡を絶つた訳ではない。
 りやうごくばし あひだ
 両国橋を間にして其の川上に富士見の渡、その川下に安
 たけわたし
 宅の渡が残つてゐる。月島の埋立工事が出来ると共に、築
 きぢ
 地の海岸からは新に曳船の渡しが出来た。向島には人の知
 る竹屋の渡しがあり、橋場には橋場の渡しがある。本所の豎
 たけや わた
 川、深川の小名木川辺の川筋には荷足船で人を渡す小さ
 は ふかがは をなぎかはへん かはずち にたりぶね
 な渡場が幾個所もある。

鉄道の便宜は近世に生れた吾々の感情から全く羈旅とよぶ純朴
 なる悲哀の詩情を奪去つた如く、橋梁はまた遠からず近世の都
 うばひさ
 市より渡船なる古めかしい緩かな情趣を取除いてしまふであ
 わたしぶね
 らう。今日世界の都会中渡船なる古雅の趣を保存して
 こんにち とくわいちゆう わたしぶね おもむき

るる処は日本の東京のみではあるまいか。米国の都市には汽車を
 渡す大仕掛けの渡船わたしぶねがあるけれど、竹屋たけやの渡しわたの如く、河かはみ
 水づに洗あらひだ出された木目もくめの美しい木造りの船、櫂かしの艫ろ、竹さの棹さを
 以てする絵の如き渡船わたしぶねはない。私は向島むかうじまの三囲みめぐりや白しらひ
 髯げに新しく橋梁の出来る事を決して悲しむ者ではない。私は唯ただ
 両国橋りうこくばしの有無いうむに係からず其の上かみしも下しもに今いま猶なほ渡場わたしばが残のこされてある
 如く隅田川すみだがわ其の他の川筋がわにいつまでも昔のまゝの渡船わたしぶねのあら
 ん事を希こひねがふのである。

橋を渡る時欄らんかん干さいうの左右さゆうからひろ／＼した水の流れを見る事
 を喜ぶものは、更に岸くたを下くだつて水上すゐじやうに浮うかびかもめ鴨かもめと共にゆるやかな波
 に揺ゆられつゝ向むかうの岸がしに達する渡船わたしぶねの愉快ゆかいを容易やすに了解りかいする事

が出来るであらう。都会の大道には橋梁の便あつて、自由に車を
通ずるに係らず、殊更岸に立つて渡船を待つ心は、丁度
おもてどほり

表通に立派なアスワルト敷の道路あるに係らず、好んで横
町や路地の間道を抜けて見る面白さと稍似たものであらう。渡
たしぶね

船は自動車や電車に乗つて馳せ廻る東京市民の公生涯と

は多くの關係を持たない。然し渡船は時間の消費をいとはず

重い風呂敷包みなぞ背負つてテク〜と市中を歩いてゐる者

供には大なる休息を与へ、また吾等の如き閑散なる遊歩者に向

つては近代の生活に味はれない官覺の慰安を覚えさせる。

木で造つた渡船と年老いた船頭とは現在並びに将来の東京

に対して最も尊い骨董の一つである。古樹と寺院と城壁と同じ

く飽くまで保存せしむべき都市の宝物はうもつである。都市は個人の住宅と同じく其の時代の生活に適當せしむべく常に改築の要あるは勿論のことである。然し吾々は人の家を訪とうた時、座敷の床の間に其の家伝来の書画を見れば何となく奥床おくづかしく自ら主人おのづかに対して敬意を深くする。都会も其の活動的ならざる他たの一面に於て極力伝来の古蹟を保存し以て其の品位たもを保たしめねばならぬ。この点よりして渡わたしぶね船ふねの如ごときは独ひとり吾等一個の偏狭なる退歩趣味からのみ之これを論ずべきものではあるまい。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆33 水」作品社

1985（昭和60）年7月25日第1刷発行

1996（平成8）年2月29日第15刷発行

底本の親本：「荷風全集 第一三巻」岩波書店

1963（昭和38）年2月発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年12月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

水 附渡船

永井荷風

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>